

AIRがつくり出す「つながり」

アートの現場から

ACCAC通信

国際芸術センター青森（ACCAC）は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、9月30日まで臨時休館中です。9月12日までを予定していた、しまうちみか個展「ゆらゆらと火、めらめらと土」も残念ながら8月31日までの開催となりました。展覧会開催中も滞在制作を行い、精力的に青森で見聞したことを作品に反映させていたしまうちみか。予定していたトークイベントをYouTubeライブで実施（9月4日）するなど、今できる活動を継続しています。

そのような中、9月2日から12月8日までの約3カ月間、公募および海外のアーティスト・イン・レジデンス（AIR）実施団体との連携によるAIRプログラムが始まりました。こちらも9月中はオンラインのみで実施します。昨年から、日本を拠点とするアーティ



カロル・ダッタによる
デザインの例。撮影：
Keegan Crasto

れて来なかった様々なつながりを見出すことで、表現を続けていく方法を模索するプログラムを行います。

表現者たちの活動は9月頃から開始しますが、その成果が作品展示やパフォーマンス、トークなどで公開されるのは10月後半もしくは11月頃からを予定しています。

リモートでこのAIRに参加しているインドの服飾デザイナー、カロル・ダッタは、NAWA（北アフリカ・西アジア）地域、インド亜大陸、朝鮮半島、日本に伝わる衣服に関して継続的に行ってきた研究を活かして、青森で戦後に着用されてきた衣服を収集し、新

たなデザインを提案しようとしています。また青森を拠点とする内田聖良は現代社会における感情や記憶のケアと流通について考えるため、日用品を通して死者の供養、伝説などの物語が持つ機能について調査しつつ、3Dスキャンなどの技術を用いて実際に思い出の品を供養するワークショップを開催する予定です。このように参加アーティスト

たちの関心にも、どこかつながり合う部分が見えることでしょう。ACCACを媒介に、そのつながりがいかに拡がっていくのか、ご期待ください。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員 慶野結香）

※第1金曜日掲載。今回は都合により変更しました